

『土の歌』に寄せて

まず前奏のピアノで下降していく音型に注目してみよう…ドシラソと豊かに下る自然な営みに聞こえる安定した音型は、私達が土に生まれ土へと帰る摂理の表れであろう。

この音型はしかも随所に出てくる、また、半音の下降音型も表れるがこれは苛酷な中での祈りのテーマとして扱われている。土のなかに埋もれていくことを抵抗するような天に向かう祈りとして随所に出てくる。

そしてこのカンタータは色々な作曲家の音楽が顔を出す。ベートーベンだったりブラームスだったり、マーラーだったり、ある時は山田耕作だったり、もう入り交じった音楽が、寄せ集めでなく整然と並んでいて心地よい。

何といても終曲の荘厳さには適わないかもしれないが、中盤のモグラの歌…モグラの憂鬱と、モグラになれない私達、このモグラの曲に現代の私達が投影されているように思える。そして、やはり終曲は愚かな人間達を含めて総てを包み込む神々しい音楽が私達に安息と警鐘を与えているのである。

土の歌を通して、私達は再びあるべき摂理に身を委ねて音楽に浸ることも必要であろう。

『土の歌』に寄せて 2

土の歌を語る前に作詞者大木 惇夫について私達はある程度知っておくべきではないかと思えます。彼の作品程彼自身のこととはあまり広く知られていない中、彼の生き様なりを知っておくことは重要な事であり、またとても興味深いことだと私達は気付くでしょう。彼の生い立ちを知ることでひとつの取っ掛かりが見出せればそれは一步土の歌に近付いたこととなります。ここでホームページ上から彼のことについてざっくりしたものを読み取って頂きましょう。

さて、彼の恋愛感はどうでしょう。ここに彼の代表作とその解説によって彼の人生を垣間見ることができます。

彼は、一生懸命生きてきた82歳の彼自身の人生を少しも悔いていないこと、愛しぬいた初恋の人との恋愛が真実であったことをずっと抱き続けながら、ある時はヒロシマ・ナガサキの原爆投下について、ある時は地の恵みと大地の偉大さについて切々と語り始めました。その集大成が「土の歌」であることは紛れもない事実であり、その下地には自らの戦争体験とはかない恋愛の顛末があったからだと言っても言い過ぎではないでしょう。

私自身、彼のことをもっと良く知りたくと考え、3/25 に彼の作品をカンタータとしてオーケストラで再現する試みに参加しています。

☆ 土の歌、その音楽の深遠 1

『土の歌』その冒頭の音階について先日触れてみましたが、歌が始まってからの音楽も極めて解りやすくそして謎めいている。

まず最初の楽節メロディ部分をピアノの黒鍵だけで弾いてみると98パーセント弾くことが可能である、日本の陽旋法を使っているからであり、しかしただ1音弾くことができない音により僅かに西洋音楽を匂わす…山田耕作か信時潔と言った辺りの作風をこの曲で感じ取れるのであろうが、一方、有名なチャイコフスキーの交響曲『悲愴』（第六番）1楽章のメロディを黒鍵だけで弾いてみると同様に1音だけを除いて完全に弾くことができる、しかもその1音は『土の歌』と同じ音であることが解る。音階を素晴らしいメロディとして自在に操るチャイコフスキーそのものの音楽に非常に似ているのであり、だからこれは西洋の音楽とも言えるのであり、その2面性を兼ね備えたままカンタータは進んでいく…。

さて第1曲のサビの部分の特徴は何かといえば、目まぐるしく変わる調性、1小節毎に変化する色合いはモーツァルトの後期作品のワルツに似ている。音楽の経過でそのたびに空気が変化していくのである。四季を感じる瞬間でもある。

土の歌第2曲は、発祥と拡散を読み取ることができる。全体的にマーチで進み、ときにハチャトゥリアンの剣の舞を思わせるような雰囲気の中、時にはエキゾチックな旋律（文明の発祥でもあるエジプトかアラビアの音楽にも似て…）を経てフィナーレに突入していく威勢の良い曲である。この威勢は破滅へと向かう行進曲か、または偉人達の焦りか…。すべてはいずれにしてもどうあがこうと第3曲へ進むのである。

☆土の歌、その音楽の深遠 2

『ヒロシマの、そしてナガサキの痛みを本当に人間達はわかっているのか』と絶望的な旋律が虚しさと共に最後までドラのようなリズムを背負って継続する。分かり合えない偉人取りの凡人達が再び同じ間違いを繰り返してまで…破滅の導線は常にかねらの足元にあるとも気付かないで昨日の裏切りを明後日に晴らそうとしている惨めさ。そんな人間どもの浅はかさも土がえぐりとうろうとしている。土の、届かぬ歌をどれだけ伝えられることが出来るだろうかと悩みながら必死に訴えかける重いシベリウスにも似た旋律の想いがこの歌に込められている。

『もぐらもち』とは‘餅’のことではなくて恐らく広島辺りの方言としてモグラのことをそう呼んでいたのだろう。行く先の見えないモグラが彷徨い歩くさまを捉えてそれを人間だと冷笑する…人間の行き着くところはやはり土の中しかない。その土をなおざりにして、土の中の生きもの達を無視して暮らすことは土の上に生きるものとして許されないことなのだ、と、半分諦めたかのような、しかし皮肉を込めて我々に訴え掛けようとしている。私達にしてみれば音取りの‘苦悩’？を課せられた立場として八方塞がりの気持ちは分からなくもないが…。

☆土の歌、その音楽の深遠 3 ☆

第5曲目は何と残酷な曲だろう。冒頭の脈絡ない和声が地球の断層を隆起させながら、これまでの祈りとしての下降音階が白羽の剣として深く私達にめり込んでくる。それはあたかも神が微笑みを翻して怒りの形相で天罰を下すかのように…。

やがて終末で一瞬青空が覗くわずかな瞬間、しかしそこに手を差し伸べようとする人間に再び覆い被さろうとするかのように…恐怖がとめどなく襲ってくるそれはまさに地獄絵。…そして一転今までの嵐が嘘だったかのように澄み渡った空から天使が舞降りた、感謝の祈りを讃えながら…土が創造し育てた自然を、今受け入れるべきと… [第6楽章]。土の底から恵みの言葉が発せられ壮大なフィナーレへと私達は導かれてゆく。それはもうそこに行き着くことが太古から定められていたかのように…、

そして私たちは天使と共に母なる大地の懐へと導かれていく [大地讃頌]。これ迄の罪から解放放たれ恩寵を一身に受けて…。ああ、母なる大地を！ああ、讃えよ大地を！

——全編を振り返ってみると良くできた筋書きだと読み取れます。何より分かりやすく歌いやすいことがこれまで多くの人に愛されてきた所以でしょう。単純に楽しんで歌うことで心地よい快感も得られるでしょう。それをより満足させるため、大地讃頌の取り組みについて深めてまいりましょう。

まず冒頭のピアノ…私達を誘いかける音の隆起が後半の盛り上がりを予測させて、しかし歌は飽く迄敬虔な賛美歌を歌うように進みます。特に低音部から重なってひとつになっていくその一体感を味わいましょう。ピアノの間奏は私達を優しく包んで感動的に進んでいきます。

次のテーマではピアノの右手に注力しましょう。私達が正しく進まなければならない未来への歩みをフォローしてくれています。そして、母なる大地を…と感動的なフィナーレによって否がおうでも私達は一つの和声にまとめられていきます。ここでは私達の声の力を信じましょう。込み上げる感動を包み隠すことなくすべてを開いて歌い切る必要があります。必ず土は応えてくれるはずです。今回ピアノとオケの二通りでこの曲を味わう機会に恵まれました。私達の歌声だけでなく伴奏に耳を傾げるだけで二度美味しさを楽しめます。さあ深くへ私達を誘うその音楽の力に誘 [いざな] われて…。